

あなたのスキルは社会に役立つ

2011年3月11日の東日本大震災発生直後に発足したHack For Japanと「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーから、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアができる社会貢献」をテーマにした記事をお届けします。

第108回

「やりたいことしかやらない」から生まれる活動

● Code for Kusatsu
おくみか (奥村 美佳) [URL https://codeforkusatsu.org/](https://codeforkusatsu.org/)

Code for Kusatsuは、地域の課題や「こんなサービスがあったら便利だな」という思いを自分事としてとらえ、ITを活用して課題を解決できるアイデアやサービスを考えたり、実際に作ったりするコミュニティです。滋賀県草津市を中心に2016年1月から活動しています。

日本国内で「Code for X」(Xには地域名や固有名詞が入る)と名の付くコミュニティは約80ありますが、Code for Kusatsuの印象としてよく言われるのは、「元気、破天荒、テンションが高そう」です。メンバーにそのような自覚はありませんが、なぜそのようなコミュニティができたのか、どのようなことを考えて活動をしているのかをお話します。

立ち上げまでの道のり

筆者はCode for Kusatsuの立ち上げメンバーの1人です。簡単に経歴を紹介しますと、結婚を機に滋賀県草津市に転入し、一児の子育て中です。子育ての楽しさや大変さを味わいつつ、子育てサークルなどの活動をする中で、子育て支援ができる仕事に興味を持ち、草津市役所で約11年、子育て支援関係の部署で非正規雇用として働いていました。どこにでもいる普通の主婦です。

2015年、草津市が運営している子育て情報を発信するWebサイト「ほかほかタウン^{※1}」がアップデートされ、併せてアプリ版もリリースすることに

なり、筆者はその業務の担当者になりました。「地域の子育て事情を知っていそうだし、パソコンも使っているから」程度の理由だったのかもしれませんが、一方的に届けられる行政情報だけではなく、日々子育てに奮闘する保護者が本当に知りたい情報を届けられる！と筆者は意気込みました。

さらに、自治体境界でオープンデータというワードが同時期にはやっており、草津市も取り組みを始めたところでした。先述の子育て支援サイトとそのアプリ版では、担当課が異なる子育て支援情報を取りまとめ、必要な時期に発信する必要性がありました。担当課の業務の把握と、それに付随するデータの棚卸し、さらにはそれらのデータをオープンデータ化することで、子育てという分野に関係なくデータの活用が広がっていくのではと、筆者は期待を膨らませていました。

原点は「誰もしてくれないから自分でやる」

しかし、市のオープンデータ推進に関する取り組みは思っていたようなスピードでは進展せず、筆者が本来担当している業務のスケジュールと進捗が合わなくなってしまいました。

そんなときに知ったのが、ITで地域課題を解決する活動を行うCode forの存在でした。オープンデータが活用されないのなら、自分たちでオープンデータを作り、それを活かしたものを作れば、みんなにその価値が伝わるかもしれない。そこで生まれたのがCode for Kusatsuでした。

注1 草津市子育て支援サイト「ほかほかタウン」
<https://kusatsu-kosodate.jp/>

子育てサークルと同じノリで 始まった活動

オープンデータの活用事例として最初に取り組んだのが、Code for Kanazawaが開発し、ソースコードが公開されていた「5374.jp」の草津市版^{注2}でした。一緒にCode for Kusatsuを立ち上げた2人のメンバーはソースコードを理解できる人でしたが、筆者にはさっぱりわからず、ひたすらごみ収集カレンダーをCSVファイルに打ち込む作業をしました。しかし、この「わいわいしながら1つのもを作るための作業の楽しさ」が、かつて運営していた子育てサークルと同じだということに気づきました。

そして、「ITの知識がなくても楽しめるのがCode forなんだ」という思い込みから、「来たら楽しいから！」ととにかく友達に声をかけ、何をするかわからないままに友達がやって来て、さらにその友達が友達を呼ぶという流れが生まれました。当初の声かけが友達つながりだったため、筆者と同じ既婚女性と子どもが多いという、Code forとしては珍しい集団となりました。

できるかじゃなく やりたいかで決まる方針

しかし、あまりにもやる事が決まっていなかったため、次の活動内容を決めようとしたとき、「できるかどうか知らないけれど、こういうことが実現できたらいいな」と思っていることを共有することにしました。

そこで寄せられた課題が、「PTAが管理を担当している飛び出し坊や^{注3}の見回りが面倒くさいので、何とかしたい」というものでした。

とはいえ、ITを使うにしろどんなやり方があるのか、そもそも実現できるのか、まったくわかりませんでした。そこでお世話になったのが、Code for Japan Summitに代表されるシビックテック系のイベントで知り合った心優しい先輩方でした。

初めてのイベント開催

シビックテックの先輩方からたくさんのアドバイスをいただき、Code for Kusatsu最初のイベントはマッピングパーティをすることになりました。

草津駅前をフィールドに、全国から集まってくれた先輩マッパー（OpenStreetMap（以下OSM）でマッピングをする人）と、Code for Kusatsuのメンバーを先頭に街歩きをし、飛び出し坊やのマッピングを行いました（写真1）。フィールドペーパー^{注4}へ、見つけた飛び出し坊や、自動販売機、消火栓など気になったものを書き込み、写真も撮ります。そのあと、先輩マッパーに教えてもらいながら、OSMにデータを入力していきました（写真2）。子どもたちには飛び出し坊やのお絵描きをしてもらったり、夏場だったのでかき氷を振る舞ったりしました。こ

注4 OSMを印刷した、現地調査用の地図のこと。

▼写真1 小学生も含め、幅広い世代が参加



▼写真2 神社の社務所内で、OpenStreetMapにデータの入力作業



注2 <https://kusatsu.5374.jp/>

注3 路地などに置き、子どもに対して道路に飛び出さないよう注意をうながす看板のこと。滋賀県が発祥。

のイベントで、飛び出し坊やの見回りが大変だという課題に対して、マッピングによる手助けができたほか、Code for として自分たちのITスキルの習得も図ることができました。

「楽しい」を共有できる場に

先述のマッピングパーティの開催で筆者たちが一番重要だと思っていたのは、「Code for Kusatsuに来てみたら楽しかった、仲間とともに過ごす心地良い場に癒された」と感じてもらえるようにすることでした。

「あまりITについては知らないけれど、街を歩いたり地図を眺めたりすることが好き」という草津の人たちが、マッピングパーティの開催を知って初めてCode for Kusatsuに来てくれました。その際、心地よい場を提供できるように、メンバーの心得をいくつか決めてマッピングパーティ当日に臨みました。それが次のとおりです。

- 来てくれた人全員に、メンバーは全員が必ず挨拶をする、声をかけること
- メンバーの子どもたちにも受付係や誘導係など担当を決めて全員が役割を持つこと
- 自分たちが思い切り楽しむこと
- 打ち上げまで楽しく駆け抜けること

これらはITスキルとまったく関係のないことだったので、筆者たちにもできることでした(打ち上げの件については、単に飲み会が好きなメンバー

▼写真3 「チャレンジ!! オープンガバナンス2018」にて、高校生エンジニアによるシステム説明の様子



が多かったからかもしれません)。

先述のとおり、技術的にはほとんどできることのないメンバーが多かったので、そちらはほかの地域で先進的に取り組んでいる人たちを頼りました。

そのとき集まった人の興味が活動の原動力

マッピングパーティはそれから何度も企画、開催しています。そのほかにもいろいろな活動をしてきました。データアカデミーへの参画、出張出前講座 simulationふくおか2030の開催、公民館への講師派遣、チャレンジ!! オープンガバナンス2018^{注5}への挑戦(写真3、写真4)、新型コロナウイルス感染症の対策サイト^{注6}やテイクアウトマップ^{注7}の作成など、とくにジャンルを問わず、やりたいと声を上げたメンバーが中心になって集まり、実行してきました。その間にも、大学生や高校生エンジニア、自治体職員や議員の方などが参加し、より多様な人が多様なバックグラウンドを持ち寄る団体になりました。

個性を持ち寄るコミュニティを目指して

多様な人が集まるようになると、活動の「内側」にいる人たちを、「外側」の人たちがカテゴリ化してくることがあります。とくに印象に残っているのが、「あそこは〇〇議員がやっている活動だから」と

注5 <http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/padit/cog2018/>

注6 <https://stopcovid19.pref.shiga.jp/>

注7 <https://kusatsu.5374.jp/takeaway>

▼写真4 保育士、市職員とともに挑戦した「チャレンジ!! オープンガバナンス2018」で総合賞を受賞



「やりたいことしかやらない」から 生まれる活動

いうものでした。確かに議員という肩書で仕事をされている方もメンバーに何人かいるのですが、筆者たちはやりたいことをやりたいときに楽しんでいただけだったので、風評に合わせて活動の立ち位置を変えたり遠慮したりするなんてことは頭にありませんでした。

そこでやったのが、議員の肩書を持つ人をとにかく呼ぶということでした。偏りなくさまざまな個性が集まった団体でありたいので、特定の議員の意向とは関係なく、いろいろな考えを持つメンバーを増やすというのが狙いでした。

もちろん、議員以外のメンバーについてもどなたでも参加OKにしていますし、参加した人には全員が声をかけてその場を楽しく過ごせるよう意識しています(写真5)。

「やりたいことしかやらない」を 選択すること

Code for Kusatsuのメンバーは仕事や家庭、趣味や人付き合い、今までの人生経験や考え方、誰もがさまざまなバックグラウンドを持っていて、そのうえで活動に参加してくれています。Code for Kusatsuの活動に興味をもって来てくれることは、貴重なその人の時間を私たちに重ねてくれることだと思うのでありがたいと思いますし、大歓迎します。「ここにいたら笑って過ごせそうだな」と思ってくれたらうれしいですが、笑えない人、なじめない人を悪い人とも思いません。

また、仮に筆者たちの活動でなくても、全国にはたくさんのCode forを始めとする団体があります。

▼写真5 飲食は心をオープンにするツールの1つ



それぞれが「やりたいことしかやらない」という自由な選択ができて幸せを感じられれば、その人が所属する地域の幸福度もほんの少しですが上がるはずです。

おわりに

```
while (Japan.recovering)
  we.hack();
```

Code for Kusatsuの活動に参加される人の中には、自由を楽しむことを恐怖に感じる人もいます。また、テンションが高過ぎてなじめなさそう、という声も聞かれます。

筆者たちは確かにテンションは高いかもしれませんが、ポジティブです。たとえば毎月1回行っている定例会(写真6)では、初めて来てくれた方が自己紹介をするときにメンバーからたくさんの質問が出てきて、答えているうちに30分経ってもまだ自己紹介が終わらないということもありました。また、LTの最中に疑問に思ったことがあれば途中で話しかけたり、おもしろいと思ったら声をあげて称賛したりするので、5分のLTが30分盛り上がり続けることもありました。うるさいかもしれませんが、批判したり否定したりと、攻撃的な態度をとることはないので安心してください。

Code for Kusatsuの定例会では、ITのことに限らず、興味のあることの情報共有やイベントの企画など、ワイワイと楽しく会話しています。ITに詳しくなくても、子どもと一緒にでも、どなたでも自由に参加できます。メールの返信が早い代表がすぐに対応しますので、もし参加したいと思った方はご連絡ください。SD

▼写真6 Code for Kusatsu 定例会の様子(オフライン)

